

特別報告

香川の寄宿舎採用試験実施運動　そして香川大会成功に向けての思い

現地実行委員会事務局　石川加代子

1907年、香川の障害児教育の始まりとなる香川盲啞教育会が設立、宿泊施設が併設されました。そして、17年後の1924年香川県立盲学校・聾学校と名前を改称し寄宿舎を併設します。当時は住み込み勤務、母親代り論、管理主義的寄宿舎でした

1948年、知的養護学校の香川県立養護学校が開校、寄宿舎が併設されました。

「香川の中心部だけでなく地方にも養護学校を！」という30年あまりの願いは、保護者、教職員、県民に強く広がり、革新政権の誕生とともに、東部養護、西部養護、丸亀養護、坂出附属養護学校と知的障害の養護学校が次々開校します。しかし、寄宿舎は併設されませんでした。1979年、県立養護学校が知的養護の香川中部養護学校と、肢体不自由児養護の高松養護学校に分離し、それぞれに寄宿舎が併設されました。これで寄宿舎のある学校は4校になりました。

香川の寄宿舎指導員は、48名います。そのうち男性が13名、女性が35名です。現在、総数の3分の1が男性となっていますが、男性指導員の誕生は2003年とごく最近のことです。私たちは、男性指導員の必要性を県教育委員会交渉で何年も訴え続け、やっと採用されたのです。その後も思春期・青年期の男子生徒の生活支援には、男性指導員が各学校に複数名必要であると訴え続けました。そして、2005年に男性が1名正規採用となり2人になったことを喜んでいましたが、県教育委員会は財政難を理由に、2005年から8年間、退職者があっても採用試験を行わず、どんどん期限付き講師の雇用を増やし続けました。

全国的には、寄宿舎の統廃合が進められており、香川も2008年頃、盲学校と聾学校の統合の話がもちあがり、寄宿舎の廃止もしくは規模縮小の話も合わせて出ました。しかし、盲学校の卒業生達が猛反対したため統合の話はなくなりました。正規採用をしない理由は統合するために指導員を減らそうとしているのではないかとの懸念が残りました。このまま採用試験が行われず、非常勤の雇用が続けば、寄宿舎の生活教育の継承が危ぶまれると思い、2012年に「寄宿舎の充実・発展を求める会」を発足し、採用試験の実施を求める運動を始めました。香川県高等学校教職員組合との合同で実行委員会も立ち上げました。発足記念講演を開催し、講師に京都の寄宿舎指導員として活躍されていた永崎靖彦氏を招き、寄宿舎の教育的価値や集団生活の中で育む人間関係や自己認識・自己形成の大切さを、支援学校の教職員や保護者、施設や作業所関係者と一緒に学び、署名の呼びかけを行いました。

全教の代表者会議に参加した時、「全国署名にして、香川の運動で全国の仲間も勇気付けよう！」と励まされ署名の協力を呼びかけた結果、8655筆の署名を集めることができました。そして、2012年9月県教育委員会に申し入れを行いました。長い運動になると覚悟をしていましたが、翌年の2013年に突然、県教育委員会のホームページに選考実施が提示され、採用試験が実施されることになりました。2013年度の、2名の正規採用がありましたが、2012年度末に5名の退職者が予定されていたにもかかわらず、2名のみでの正式採用だったので、県教育委員会に再度申し入れをすると、「今後も継続的に採用していく」という回答でした。その後2年間は、毎年採用試験は実施されておりますが、私たちの署名活動も毎年続けています。現在、非常勤講師が5名おり、48名全員が正規採用ではありません。今後もねばり強く、採用試験実施の運動を続けていかなければなりません。

そして新たに、2級わりの問題があがっています。ここ数年の採用者は、30歳を超えています。香川のわりの条件は、年齢が45歳以上、経験年数が20年となっているので、50歳を超えないとわりができないという状況になっています。また、以前は教員免許2級以上の資格をもった者という条件がありましたが、高校卒業以上に変更されました。採用者の対象を広げるためという理由ですが、本当でしょうか？寄宿舎の生活教育が軽んじられてきているのではと懸念されます。

障害のある子ども達にとって大切な生きる力を身に付ける場所、自治的・文化的活動を通して精神的な自立の力を育む場所、仲間との共同生活の中で信頼関係を築くことで自己肯定を実感する場所が寄宿舎です。この大切な場所を守るために、私たちは今後も署名活動を続けていきます。そして、子どもたちひとりひとりへの適切な支援や生活の場をつくる生活指導の専門性を身に付けるための学習も重ねながら、指導員ひとりひとりが確信をもって取り組めるような議論もしていきたいと思っています。

さて、全教に結集する私たちは、「ハチドリの一としづく」作戦と銘打ち、「わたしたちができることをしていく」ことで組合を強く大きくしようと取り組んでいます。

山火事を消すために、小さなくちばしで水を運ぶクリキンディという名のハチドリに、森の仲間たちは無駄だと言って笑います。でも、クリキンディは答えます。「私は、私にできることをしているだけ」

この言葉は、私たちが携わる全ての事、教育、運動に通じると思います。目の前の子どものために、働く職場のために、大切な家族や仲間のために、常にあきらめない気持ちを大切に、今、自分のできる事を一生懸命しようという気持ちを奮い立たせてくれます。

全教から「香川で全国学習交流集会を開催してほしい」と話があった時、真っ先にこの言葉が頭に浮かびました。同時に「こんな少ない人数で全国規模の大会を引き受けて大丈夫だろうか？」と、大きな不安も押し掛かりました。まず、私たち寄宿舎指導員を支え続けてくれている先輩に相談しました。「引き受けないという選択はしないでほしい。断るのであれば、今はできないけれど、何年か後には引き受けますという前向きな断り方をしてほしい」という助言がありました。そして、支部の組合員にこの言葉と共に、全国大会のことを相談しました。「採用試験実施の署名運動に取り組んだ時、助けてもらった全国の仲間へ感謝したい」「採用試験が実施されて合格した仲間が活躍している姿を見てもらいたい」「自分に自信をつけたい」「寄宿舎の将来のために学びたい、みんなで考えたい」「子ども達の卒業後の生活を豊かにするための実践を学びたい」、「自由な寄宿舎、発想を変えれば色々なことができる寄宿舎の魅力を伝えたい」「子どもが元気になる寄宿舎を作るために、他県の実践を学びたい」と、次々に指導員の思いが語られました。

「今、私たちができることをしよう」この気持ちをもって、全国大会を引き受けることにしました。大会のテーマ「学ぼう！伝えよう！寄宿舎教育の魅力を！その感動を、かがわけんで見つけるけん！」には、香川の組合員の思いがいっぱい詰まっています。この2日間、おおいに学び、語り合いましょう。そして何かを見つけてください。これで特別報告を終わります。ありがとうございました。